国木田独歩の佐伯での生活（十二）

山内武麒
（賛助会員・佐伯市城下東町）

二十五日は午前九時過ぎ寓居している坂本家を出発して、葛港に出て茶屋で休憩して上り汽船を待った。久しく待ったが気船が来ない。待ちくたびれて一人で散歩した。

妙見社に行く、この社は海に突出した小さい丘の上にあって、樹木が生い茂り海風で梢が音を立て、波の響が麓から聞え、ものさびしい風景である。もう以前から度度弟と一しょに逍遥を楽しんだところである。しかしこの社が妙見社であることを知ったのはこの時が初めてである。

吾独り徘徊して去る能はず。堂に上ぼりて、或は壁上の戯書を眺め、或は「百人一首」の中、小野小町・在原業平等数名の肖像に伴ふ和歌を額にして掲げたるを仰ぎ見、人間の事、時の変遷の事、人情の事、天地の事など感想し来りて幽思転た、深きを覚えぬ。

此古びたる神社、如何に吾が同胞の人々の「情」の現はれなる可き。

と、この社の情景とそれを眺めての感想を記して、

この古社もこれまた実に人間に表われた一つの事実である。感想し、回想し、同情しくると、この古社でも大きな歴史と深い詩歌と玄なる宗教の奥義を語るのではあるまいか。自分はつくづくとそう感じたのである。

と、感懐している。

この妙見社のことについて佐藤鶴谷の「佐伯志」を見ると、この社は北斗七星を祀った社で、昔安和元年に大入島石間浦の沖に星が落ちた。それを宮として祀り守後浦に勧請したが、寛弘五年五月五日に神託によって坂野浦の嵐崎に遷座し、更にその後宝永年間に現在の社地に

遷したのである。祭事は九月九日と十一月二十五日に行う。と、ある。星を祀ったお宮である。

また、葛港を背景として書いた独歩の小説「源おぢ」の中には、この妙見社が点景として出ている。

「源おぢ」の上の部に、

彼の年二十八九の頃、春の夜更けて妙見の燈も消えし時、ほと〳〵と戸をたたく音あり。源起きて誰ぞと問うに、島まで渡し船へといふは女の声なり。傾きし月の光にすかし見れば兼ねて見知りし大入島の百合という小娘にぞありける。

と、あり、更にまた

島の小女は心ありて斯く暗くも源が舟頼みしか、そは高きより見下し給ひし妙見社ならで知るなき秘密なるべし。

と、ある。源おぢとその妻となった百合との出会いの場面である。

この妙見社は、普通「妙見さん」と呼ばれ、筆者にはなつかしいお宮である。少年の頃、葛港で育った筆者にはこの妙見さんは格好の遊び場であった。我家のすぐ裏が妙見さんのある山であった。晩秋の頃、椎の実拾いや松茸狩りをして楽しんだことを今も忘れられない。閑さえあれば散歩してこの社に詣で、独歩の記にあるように海風を梢に聞き、波音を麓の岩浜に聞いた。社殿に上がって寝ころんで六歌仙の額を仰ぎ、和歌を繰返し〳〵朗詠したものだ。この山には赤松の林があったので晩秋の頃にはよく松茸が生え松茸狩で賑わっていた。雨上りの早朝、人に知れぬよう山に登り、雨に湿った落葉を掻き分けて松茸を探がす。落葉をもたげてその丸い頭を出しているのを見つけたときの嬉しさ、思わず歓声を上げたものだ。夜は松茸汁に舌鼓を打ちながらその日の手柄話に花を咲かせたものだ。

筆者は三年程前、五月の中頃久しぶりに葛へ散歩して妙見社に参詣した。かれこれ六十年ぶりであろう。この日は五月晴れの好天気で、朝九時頃家を出て駅までバスで行き、駅から歩いて葛へ向った。昔からある葛道を行き、田ノ浦・市ケ谷・葛へと昔を偲びながら歩いた。昔のまゝの家も二三軒あったが殆んど改築されて新らしくなり昔の面影はない。たゞ独歩が下宿した昔の鎌田旅館が昔のまゝに残っていたのでなつかしかった。

この家の横の妙見社への登り口の石段も昔のまゝであ

った。この石段を登ると山道になる。道は昔と変りなく凸凹道だ。道の左上の山の様子はがらりと変って、昔松茸のよく生えた赤松林は全く無くなって雑木林の籔と化している。社を取り巻く森は余り変りないが、社の鳥居の前から坂の浦へ下る坂道はすっかり削り取られて崖となり、このあたりを覆っていた椎や樫の森は全く消えていた。

鳥居は昔のまゝであったが、社殿は修理されてその趣きは全く違っている。社を取り囲む森林もまばらになっていた。社殿に上がってみると、内部の模様も変っていたが、壁に六歌仙の額が昔のまゝに掲げてあるのを見てなつかしかった。

社殿を一周してみたが、昔の面影を偲ぶ由もなかった。

記のつゞき、

汽船来り乗船す。正午と覚しき頃漸く出港す。

と、ある。汽船が大分遅れたようである。この上り汽船の定時は午前十時であった。

この汽船の中でたま〳〵鶴谷学館の生徒である峰安世と出遇っている。この少年は自分で思い立って神戸へ行こうと出立したとのことであった。

次に、

（十二時鳴る、二十六年去りぬ）と記してある。

三津ケ浜港に着いたのは二十六日の十二時すぎであった。広島通いの小蒸汽はもう出発した後であった。この晩は三津ケ浜に一泊した。二十七日三津ケ浜を小蒸汽で出発し、午後四時すぎ宇品港に着き、すぐ下り汽船と乗りかえその夜の十二時頃ようやく岸の下港に着き、帰宅したのは十二時すぎであった。

二十八日は自宅で暮し、二十九日麻郷に行き、一泊して三十日に別府の石崎氏を訪い、その夕方、河手氏を訪い、一泊して三十一日に我が家に帰った。

次に麻郷や別府で色々なことを見たり聞いたりしたのであろう、その感想を書いてある。

人の世の色々な事実に色々と感じることが深い。言いかえるとこの事実は人生の意味であると強く感じる。

事実には意味がある。空想には意味はない。人生の意味は、人生の事実が語るところである。この事実によって意味を直覚する。これが霊妙な人間のソールの不思議な働きである。この働きをもつのが詩人である。

普通の人は事実になれて無頓着であるが、詩人や予言者は真実こめてこの事実をよく観るのである。

そして、次にその見たことと聞いたことを記してある。

多く見たり、多く聞きたり、思へば此等の事実悉く深き意味ある哉。

と、書き出して

東家の下男為の兄の蔵が盗みを働いて監獄に入った。

以前石崎家でごろついていた徳も盗みをして監獄に入った。

石崎のゆり嬢は半分死ぬような大病を患いそれが癒えて可憐な少女となり、また自分と会うことが出来た。

その外、神田静治・小川今蔵・中川某（別府役場職員の一人）・川手忠などの人物とその境遇と経歴など。

次に一人一人の個人についてよく観ることの大切なことを記してある。

一人を見ることは千億万人を見ることである。一片の心はあらゆる人間の心であり、一片の情はあらゆる人間の情である。

一個人の上に行われる自然の法則は万人の人の上に行われる法則である。

歴史、即ち万国の幾千年の歴史も、あらゆる国々の宗教も、凡ての詩人の詠んだ詩歌も結局一個の人間の一心一体の活動にすぎない。

一個人を深くよく見ることは、あらゆる歴史、あらゆる宗教、あらゆる詩歌を見ることである。

と一人の人間をよく深く観ることを説き、

人間を支配する者は人間なり。

と、記してある。

次に

吾老ひねばならぬ乎。人間の恨事これに過ぐ可けんや、

と、老いることを恨み、老いて少年の心を失ない、自分の若い友もまた老い、自分が愛する少年少女も老い、そしてみんな等しく逝ってしまいつゝある。

恋愛・友愛・愛慕など結局何ごとか。しかしこれらは人間の命の粋である。人間にとってこの上もない大きな意味をもつものである。

人間、人間、人間、人間は人間を信じるより外はない。人間であるからには人間を呪うことは出来ない。人間であるからである。

と、説いて

人間は自由のソールの所有者なり。否ソール其者なり。これを思へば吾も甚だ自由を感ず。何の御遠慮、何の憚りのある者ぞ

と、結んである。

明治二十七年一月の記について書く。

一日の記には

記さんと思ふ事多し。

見たり聞たり感じたりすること少なからざればなり。

と、書いて、年末の二十九日、三十日に前記にあるように麻郷や別府の旧知の家々を訪問した時に見たり聞いたり感じたりしたことを次に次々と記してある。

先ず初めに大嶋尚三のことを書いてある。

大嶋尚三は年老いて子がなく、今はその職を失って、老いた妻とともに東秀さんの家に間借りしている。この部屋は東のおばあさんが二十五年の秋まで住んでいた部屋である。

大嶋尚三は計らずもこの部屋を借りて住むことになったのである。聞くところによると、彼が職を失なった原因は、或悪人どもが企んだ詐欺行為の凶行に多少加担した為であった。これで登記所小使の職を罷めさせられた。この老人はわが一家が吉見家の家に寓居している時、しばしば家に来て酒を呑んでいた。子がない。たゞ老夫婦だけ。彼の罪悪は誰もが認めるところであるが、無罪が宣告されて幸にも監獄の苦しみからまぬがれた。自分も人もその罪をにくむが、その老いて職なく金なく子のないのを憐れに思う。

一人のこの老人とその妻、彼らの運命、罪悪、不幸は確かに詩料とするのに十分である。

明日はまた麻郷村を訪ねる。この老人も訪ねよう。その不運な境遇、そして一度罪を犯かして良心の可責を受けつゝあるその心、その老体、悉く観察し同情の種でないものはない。

自分はこの一人の人間の心を思うと、同情に堪えないのである。

次に

東秀氏の目代為の兄蔵（くら）なる者が盗して獄に入るに至

りし事は昨日の記に誌し置きたり。

と、書いて蔵という男のことを書いてある。

目代とは下男のことである。

為の家族は為と老母と妹（或は姉）と兄との四人暮しであった。ところがこの秋赤痢病が流行した時に、老母と妹とははかなくもその病に罹って死んでしまった。残ったのは為と蔵とだけであった。ところが為は東家の下男となって、蔵だけが家に残った。蔵は酒が強く毎日飲んでいた。近年田布施町に出て料理屋に入りびたり、とうとう金につまって、自分の叔父に当る人の米を一俵ばかり盗んだ。詳細なことは知らないがこれも注目すべき一つの事実ではないとは云えない。

その老母は死んだ、妹も死んだ。そして一人で空屋に住んだ、そしてとう〳〵獄裏の人となった。

次は徳のことである。

徳が堕落は全く無教育と飲酒と怠情と無恥とに在り

一昨日別府から大野の河手氏宅へ行く道を人力車に乗り、徳造のことをこの車夫から聞いた。

車夫の言うには、人間は二十四五歳から六七歳の頃が最も悪に走ることが多い。徳造は丁度二十五歳ばかりである。何故なら男が成長して二十四五歳になると、精気が十分にあらわれ外部に対してあくまで自我の念が燃えさかり、人を恐れず世をはゞからず恥を知らない。この頃一度悪に陥ちたらもう二度と矯正することはむずかしい。と、話した。

甚だ意味ある言と言ふ可し、実に意味ある言と謂っ可し。

と、感心している。

そして、次は自分の母のことである。

これは昨夜母と二人で色々と話したときに聞いたことである。

吾が老母（母の母）と母との悲哀極まる事実を聞きひそかに泣きぬ。吾が母、故郷をはなれ、老母に遇はざることと殆んど十九年、母常にこれが為めに泣きぬ。老母今や銚子に在りて日夜、母の帰をまつ也、母は吾が一家の事條の為めに今日まで終に帰省する能はざりし也。

と、母の嘆きを聞いて、

嗚呼世は終にミサリーの世か

と、悲しんでいる。ミサリーとは不幸。

この祖母は名をはつと云い、当時七十六歳であった。母まんが父専八の招きに応じて、亀吉（独歩の幼名）を連れて上京したのは、明治七年で、独歩が四歳の時であった。それ以来母は故里の銚子に里帰りしないので、十九年間祖母と会うことが出来なかったのである。

人は結局、人を人として主観するのみである。客観すると云っても結局、人より以外のことを考え知り得ることは出来ない。自分は次第にはっきりと悟った。それは

人間は人間の事実の外何事の意味も知り能はず、人間の事実こそ人間を説明する者なり。

と、云うことである。

次にものの見方について記してある。

ア、小児は愛らしき哉、友は愛すべき哉、山と雲と星と月と花と凡て自然は美しき哉、人間豈に死して土となりて止まんや。此の愛情、此の美感、豈に土に帰る夢幻ならんや

ア、吾をして清き愛、深き情、同情の眼あらしめよと、愛と情をもって同情の眼でものを見るべきであると説きて、

人と物とを批評的に観るな。と、さとし、

同情があれば自分たゞ一個の小イゴ（利己本位）にはならない。虫でも鳥でも農夫でも少女でも、或は盲でも貧しい婦でも、また、悪人でも罪人でも温たく観ることが出来る。

ためしに自分を一人の樵夫として、この世、この生命恋、欲、望などを観させよ。きっと小イゴーでは観ることの出来ないところを観ることが出来る。この同情心は観察することから起るのである。

と、説いてある。

（つづく）

次号原稿〆切日

十二月三十一日

期限には必ず
お願い致します。